

週報

2007年 3月 25日



主の業に励もう コリント15:58

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

教会学校	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル商会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

牧師 村上定幸

今朝の聖書から 『ルカによる福音書』20:9～19が開かれます。ところで“家造りらの捨てた石は、隅のかしら石となった。”というのが、詩篇118:22の御言葉にあります。イエス様が今朝の聖書箇所を語られたとき、旧約聖書に詳しい人達が聞いていたわけですから、20:19にある“このとき、律法学者たちや祭司長たちはイエスに手をかけようと思ったが、民衆を恐れた。いまの譬が自分たちに当てて語られたのだと、悟ったからである。”というとき、詩篇を思い出していたのに違いありません。この頃には“隅の頭石”という言葉がよく使われていたと思われます。日本式に言うところ“だいこく柱”ということにでもなります。聖書自信が喩えだと言っているのですから、実際の葡萄園についてではなく、神の神殿でわがもの顔に、したい放題をしている、信仰上の指導者に当てられたものであることが判ります。神殿、更にこの世界全て、私たちは自分で開拓し、あるいは自力で建てあげたと誤解することは多くあります。神様のものであり、神様から豊かな恵みをいただいたのですから、神様にお返しすべきなのに、私たちが、自力で作ら上げたと誤解していることが沢山あります。神様の葡萄園から利益だけをせしめ取り、そこに固執してはいけないうと、御自信がエルサレムで成し遂げようとしている救いのわざと、その石こそが私であるということとを重ねあわせ、人々を教えるおられるのです。考えて見ると判りますが、大黒柱はすぐ判ることもありますし、装飾の陰になってしまい、よく分からないこともあるのです。私たちは釘を壁に打つとき、トントンと叩いて見て、中が空だったらそこに釘を打っても意味がない、ということを知っています。楽しいからと言って、美しいからと言って、空洞の薄い壁に重い、美しい飾りを施していることはないでしょうか。そんなときに20:18に書かれていること“すべてその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんになるであろう”ということが実際に起こるのです。時には気付かれずに、捨てられる邪魔な石、人生の出来事、私たちの経験や身の回りにあるもの、全てを見回して、本当の基礎になる土台が、私たち信じるものにとってはイエス様であることを、もう一度、聖書から聞きましょう。